



ことしば



2月号

【学校教育目標】 「挑戦し、未来を拓く『琴芝っ子』の育成」



『節分』に思う ～ 「鬼は外」の鬼とは・・・ ～

『1月はいく。2月はにげる。3月はさる。』という言葉のとおり、あっという間に1月が過ぎてしまいました。2月3日は『節分』です。節分は、読んで字のごとく季節の分かれ目のことです。翌4日は『立春』。例年なら一番寒さが厳しい頃で『暦の上ではもう春です。』と、前置きをして立春を伝えることが多いように思いますが、今年は暖冬です。記録的な降雪量の少なさ、暖かさ(高温)だそうです。通勤通学等私たちの日常生活にとっては都合の良い気候ですが、一方で伝統的な冬の祭りが中止や変更を余儀なくされている地方も多いようです。さらに、雪解け水が少なくなり、春の農作業へも影響が出るのではとされています。立場の違う人を思いやる、様々な角度から物事を見つめることのできる、童謡詩人・金子みすゞさんの『つもった雪』の詩が浮かんできます。

さて、日本では昔から、節分に豆をまき、厄払いをするという伝統的な習わしがあります。豆をまく時に多くの地方では「鬼は外、福は内」と声をかけながら行います。外に出す鬼とは何でしょうか。一般には無病息災ということで、健康を害するものを「鬼」としていますが、もう一つ、自分の心の中の「鬼」を退治するという意味もあるように思います。「まあこれぐらいなら・・・」「今日一日ぐらい・・・」という気の緩みや怠け心が心の『鬼』といえるでしょう。月日は毎日変わらず流れていきますが、だからこそ人は昔から節目を大切にしているのではないのでしょうか。私たちも先人の知恵に学び、節分に豆まきをしながら自分自身を振り返り、もう一度気持ちを引き締めて年度末を迎えたいものです。

6年生は、卒業まで30日あまりとなりました。6年生だけでなく、進級する各学年の子ども達が、希望をもって明るく元気に進学・進級できるよう、最後のまとめをしっかりとしていきたいと思います。学校、家庭、地域で子ども達の見せる顔は様々です。学校、家庭、地域が力を合わせて、その時その時の、その場その場の、子ども達のよさや成長した姿をしっかりと認め励まし、新しい学年へつないでいきましょう。

『つもった雪』 金子みすゞ
 上の雪 さむかろな。
 つめたい月がさしていて。
 下の雪 重かろな。
 何百人ものせていて。
 中の雪 さみしかろな。
 空も地面も見えないで。



校長のつぶやき

『親子で高める自己肯定感』 ～ 山口新聞(1月15日)より ～

先日、標題の記事が目にとまりました。自己肯定感とは、『自分の軸を支えるエネルギーで、誰もが本来持っているもの。成功や失敗などの経験やその時の感情や寝不足や疲労といった体調に影響されるなど、変動が見られるもの』だそうです。親子の間では影響が強く表れ、特に低学年ぐらいまでの時期は、言葉に心配りが必要だそうです。「だめな子ね」という否定的な言葉は、子どもだけでなく、親自身の自己肯定感も低くするという負の連鎖に陥り、家庭の雰囲気も悪くなってしまうとのこと。それを改善するためには、「ありがとう」と笑ったり、天気の良い日に窓を開けて「気持ちいい」と言ったりという、日頃の何気ない肯定的な言葉を意識して増やしていくことが大切だそうです。「SNSが発達し、育児の方法論やママ友の投稿など大量の情報が入ってくる時代。大切なのは、他人と比べたり、『いいね』に一喜一憂したりせず、自分で自分を肯定し『いいね』と言ってあげる力が大切。自己肯定感とは、いつからでも高められるので、親子でともに過ごす時間を楽しみながら高めあって。」という言葉で記事は締めくくられています。

『リフレーミング』という言葉があります。これは「ある枠組みで捉えられていることを別の枠組みで捉え直し、新たな価値を見つけ出す」という心理学用語です。例えば、コップに半分入った水を「半分しか」ない」と捉えるか「半分もある」と捉えるかで価値が全く違ってきます。ネガティブな出来事(言葉)をリフレーミングして、ポジティブな出来事(言葉)に捉え直し、楽しい会話を弾ませたいものです。学校では、『親』を『教職員』に置き換えて、子ども達の自己肯定感を高めたいと思います。

